

前方後円墳からアメリカを眺めると —平城遷都 1300 年記念日米文化比較—

橋本賢二

2010 年は 710 年の平城京遷都から 1300 年目にあたる。奈良ではそれを祝って復元された大極殿^{だいくてん}を中心に、年間を通して、県下各地で盛大な祝祭イベントが開催された。夏場でもあいにくの暑さにもかかわらず、多くの人々が古代へのロマンを求め熱心に会場へ足を運んだ。千三百年、13 世紀。真実の姿は誰にもわからないほどの永き歴史。悠久の時をさかのぼる祭りだからこそ、人々の心をひきつけるものがあるのだろう。世紀に一度の慶事を契機として、今回は大和の地から、日本人の文化的背景に目を向け、さらにまだ建国浅い海の向こうのアメリカを眺めながら、日米比較文化論の芽を探してみたい。

* * *

地図を広げ、伊勢の二見浦^{ふたみがうら}から島根の出雲大社に物差しを渡して結んでみると、その直下に奈良が位置している。出雲が「雲いずる国」つまり「日の沈む国」を意味していることから推察すると、伊勢とは「いでる」つまり「ものが出てくる」という言葉が語源なのだろうか。伊勢から昇った太陽は奈良を通り、出雲に沈むという図式だ。おそらく縄文の時代には、日本海に面したそのあたりに日本の首都があり、今とは違う皇様の一族が日本を何代にも渡り支配していたのだろう。もしかして縄文とは縄目の紋様ではなく、当時の人々が魔よけのために入れていた刺青^{がら}の柄ではなかったのかと想像してみる。

信州諏訪大社の御柱祭は、巨大な 16 本のモミの大木をひく 7 年に一度の祭りだ。そこにはまさに縄文時代の文化を受けつぐ巨木信仰の名残が見える。史書によると島根の^{おおくにぬしのみこと}大国主命の王子はここまで追われて逃れ来て、諏訪湖に身を投じたそう。恐れる先の王族をなかなか簡単に葬り去れないのは世界のいずこにおいても同じだ。神社と祭りには怒りを鎮める目的もある。大きな社^{やしろ}を建てて先王をそこに封じ込め、死後の世界を譲ることで納得してもらおうとしたヤマトの王権は、

たたりを恐れその建築物を空前絶後の大きさとする。一般には二礼、二拍手、一礼の参拝も、そこ出雲大社では死を意味する「四拍手」で、注連縄しめなわのねじりも逆向きらしい。

一方奈良の「やまと」はご神体が三輪山そのもので、「みわ」とは神のことを指す。現在中国語ではイギリスを英国と表記し、アメリカには美国というすばらしい漢字が与えられている。ちっぽけな国（民）を表す「倭」が蔑称であることを奈良時代に知ようになる日本は、自国を「和」と書き改め、大きな和国、として大和を用い始める。「邪馬台国」も「卑弥呼」も「奴国」も音を写したひどい当て字だ。もともとヤマトのご神体は「大和魂」という柱だったらしいが、天孫降臨の国、九州、日向宮崎の王国と合体したときに太陽信仰も加わり、光を集める「鏡」がご神体としてそのそばに置かれたらしい。そう考えていくと、墳墓から見つかる多くの鏡の意味は、陽光が満ちるように頭部周辺に置かれた擬似太陽であり、その特殊な墳墓の形も鏡を模しているように思えてくる。

さらに空想は広がっていく。古墳は造られた当時あの丸い部分に白い石が敷き詰められ、鏡のごとくまばゆい光を八方に照り返し、ピラミッドのように燦然と光り輝いていたそうだ。前方後円墳のいくつかをよく見てみると、その丸い鏡と、それを立てかける鏡台に見える台形の方墳部分との境目に、鏡を支える「鏡台の縁枠ふちわくに相当する突起」がちょっぴり出ているのが確認できる。つまり前方後円墳はひっくり返すと、鏡台に立てかけられた円鏡にも見えてくるのである。

やがて日本が「日いずる処の天子」として中国の「日没する処の天子」にそのプライドを示し始める時代になっていくことを考えてみると、伊勢から延びた物差しの終着点は中国長安にまで伸びるのではと試してみたが、残念ながら朝鮮半島に行ってしまった。しかしよく調べてみると、伊勢市二見町は北緯 34 度 30 分、現在の西安は北緯 34 度 16 分。もし本当の太陽がこの上を通過するなら、その表現もまんざらではないのかもしれない。

夫婦岩があったからだろうが、福岡や大分にも二見ヶ浦はあるそうだ。さてその太陽はどこへ沈むのだろう。

西暦 535 年ごろ北半球は過去 2000 年間で最も冷え切った時代を迎えている。その原因は史上空前の火山爆発とも彗星の衝突とも言われている。年輪のデータを調べてみると、その時代の年輪の間隔が極端に狭くなり、樹木の生長が大きく阻害されていることがわかる。この頃その影響はほぼ全世界に及び、日光は遮断され作物は育たず、さらに旱魃や洪水が続いた。さまざまな文献によると空は何年

にもわたり噴煙で覆われ太陽が姿を消し、日食のような暗がりとなり、大気汚染で人々は健康を害し、飢饉が起き、ペストなどの疫病が流行り、全世界で大勢の人々が亡くなったそうだ。

やがてその影響は太陽信仰の国、日本にも及び、大きな変革が始まった。「神道」から「仏教」への転換である。大仏建立はそんな時代の変革を世界に示す一大事業だったのではと考えてみれば、またおもしろい光景も見えてくる。

日本は湿度が高く、地震があり、木と紙で出来た建造物は2千年でほぼ消滅してしまい、記録が残らない。石と銅で出来た乾燥地帯の大陸ではこんな時代のことはお見通しだろう。素人がこんな勝手な妄想と空想を巡らせることができるのも、風土の違いのおかげとすることもできる。その道の確かな専門家が文化と自然科学の歴史を合わせて眺め見ることができたなら、そこにまた新たな発見があるかもしれない。

そんな日本で生まれ育った人々は、何代にも亘り同じ地域に定住し、他の地方へ移り住むということがほとんどない。一昔前なら、一度も他の場所へ居を移すことなく、生まれた場所で生涯を終える人も決して少なくはなかったはずだ。

ひるがえって、海の向こうアメリカ合衆国にはこんな長い歴史はなく、植民地開拓以来すべての大きな流れがしっかりと捉えられている。そこには空想や妄想さえ許さない現実^{ゆえん}のみだ。アメリカ人が日本の悠久の歴史をうらやみ、天皇制に理解を示した所以もそこらあたりにあるのかもしれない。

そんなアメリカ人は「引っ越し」(moving)が好きだ。彼らは生涯のうちに何度か住所を変える。アメリカ大陸を縦横に移動しながら、大西洋岸から太平洋岸までためらいなく移動していく。そこでは当然、家とともに大量のゴミが発生する。移動の邪魔になるため人々はその土地での暮らしと共に、それらも置き去りにしていく。そのためイギリス人が好むような重厚で高級な伝統家具ばかりでなく、使い捨てに対応できる安価な家具もアメリカでは意外と需要があるそうだ。

使い捨てが身に染み付いて、近年流行のエコロジカルな発想が遅れているのは、有り余る国土のなかで、大地や空気を汚すことに対する認識が甘いからだけではないようにも思われる。消費し廃棄することで暮らしを更新していくという文化形態は、移民という形で近代に国家が形成された強力な資本主義社会アメリカのひとつの国民性であり、もしかすると、それらはすでにアメリカ国民のDNAのなかにもしっかりと刻み込まれているのかもしれない。「移動」の文学、ロード・ムービー、引越し話、転々と移り住んでいくことにより発生する出会い、恋愛、結婚

と別離、消費される家族、疎外感と焦燥感、所属と孤独、所有と自由、犯罪と隔絶…さまざまなアメリカ文学の要素がここかしこに垣間見えてくる。

そしてそれは、ロシアからやってきたユダヤ系移民の子としてカナダで生まれ、アメリカのシカゴに移り住み少年期を過ごし、中西部のいくつかの大学を転々とし、ニューヨークに出て活動し、世界を回り、シカゴに戻り、ボストンへ移動し、最後にヴァーモントの静かな別荘地に移り住み晩年を過ごした 20 世紀アメリカを代表するノーベル賞受賞作家、ソール・ベロー (Saul Bellow, 1915-2005) の場合にも言えることだ。移動はベロー文学の基本構造のひとつであり、重要な構成要素である。それゆえベロー作品にはさまざまな場所が登場する。主人公たちはその地に影響を受け、そこで知り合う人々から刺激を受けつつ、人生の新たな局面を切り開いていく。作品の舞台はアメリカから、ヨーロッパ、南米、アフリカ、アジア、日本など全世界へと広がり、極北の地や月さえがその対象となる。その場所を持つ「磁力」を浴びながら、何かを浄化し何かを得ていく姿が、内面と実態の変化とともに、みっちりとして濃く描かれている。

ひいてはそれがベロー文学のみならず、アメリカ文学の重要な特質のひとつとも言えるのではないだろうか。移動すること自体がテーマとなっている作品さえ、ちょっと考えてみればいくつも脳裏に浮かんでくるだろう。